イタリア語を学ぶ日本人のリクエスト表現：語用転移の分析と教授法への提案

The Request Expressions of Japanese Learners of Italian: An Analysis of Pragmatic Transfer and Pedagogical Proposals

アンドレア・チヴィーレ
Andrea Civile
ペルージャ外国人大学
University for Foreigners of Perugia

本研究は、日本人イタリア語学習者がリクエスト表現において直面する語用的課題と、それらの文化的背景に焦点を当てている。ブラジルのGPP研究チーム（サンパウロ大学「中間言語・異文化間および文化相 互間語用論」）の方法論を応用し、20名のB1-B2レベルの学習者を対象 に 、MCDCT（選 択 式）、WDCT（自由記 述）、TAP（思考発 話プロトコル）を用いてデータを収集・分析した。その結果、過度なフォーマリティ、条件法の誤用、間接性の偏重など、日本文化の影響による語用転移が確 認された。また、イタリア文化の「Bella figura」と日本文化の「内と 外」に基づく対人関係の区別が、リクエスト表現の違いに大きく影響を及ぼしていることが示された。本稿では、これらの分析を基に、リクエスト表現における語用能力向上を目指した具体的な教授法を提案する。これにより、日本のイタリア語教育の質的向上を図ることを目的としている。

This study examines the pragmatic challenges faced by Japanese learners of Italian in performing request acts, focusing on their cultural background. Using the methodology developed by the GPP (*Grupo de Pesquisa em Pragmática*) research team at the University of São Paulo, data from twenty B1–B2 learners were collected through three instruments: MCDCT (multiple-choice), WDCT (free-response), and TAP (think-aloud protocol). The analysis revealed three major tendencies: non-realization of the act in high-imposition contexts, over-indirectness through layered conditionals and prefaces, and implicit strategies that rely on the interlocutor's inference. These features reflect pragmatic transfer influenced by Japanese norms of *uchi* and *soto* (in-group vs. out-group) and conventional politeness routines. In contrast, the Italian notion of *Bella figura* emphasizes clarity, appropriate directness, and positive self-presentation. Based on these findings, this paper proposes pedagogical approaches aimed at enhancing learners' pragmatic competence and fostering culturally adaptive communication in Italian.

https://doi.org/10.37546/JALTTLT50.2-3

はじめに

イタリア語を学ぶ日本人学習者は、言語構造の習得にとどまらず、文化的規範やコミュニケーション様式を理解し、状況に応じて適応する必要がある。とくにリクエスト表現は、文化的期待や関係性の影響を強く受ける「行為の強制（face-threatening act）」であり、適切な選択が難しい。

本研究は、イタリア文化の「Bella figura（ベッラ・フィグーラ）」と、日本文化の「本音と建前」「内と外」に基づく対人調整に着目する。前者は外見・態度・言葉遣いを通じて好印象を与える行動規範として広く認識され（Bazzanella, 2008; Santoro & Nuzzo, 2017）、後者は社会的距離や立場に応じた発話形式・方略の調整を要請する。内（内集団）は調和・共感、外（外集団）は形式性・間接性を志向し、これが敬語過多や間接性としてイタリア語使用時にも転移しうる。

本研究の目的は、こうした文化差が日本人学習者の語用行動に与える影響を明らかにすることである。サンパウロ大学GPP研究チーム（中間言語・異文化間・文化相互間語用論）の枠組み（GPP, 2024）を用い、12言語比較研究の方法論を日本人学習者データに適用し、リクエストにおける具体的な語用転移パターンと教育的示唆を検討する。

本研究の目的

本研究の目的は、日本人イタリア語学習者のリクエスト表現に見られる語用転移の特徴を明らかにし、その文化的背景と教育的示唆を論じることである。リクエストは、相手の行動を求める行為であり、社会的距離や上下関係など文化的要因の影響を強く受ける。母語の対人規範をそのまま適用すると、敬語過多や過度の間接性により適切さのずれが生じ得る。

「内と外」は発話の形式性・丁寧さを左右し、外集団では形式的・間接的表現が選ばれやすい。一方、「Bella figura」は、距離を保ちながらも積極的な印象形成を重視する。両枠組みの相互作用が方略選択にどう影響するかを、MCDCT（選択式）・WDCT（自由記述）・TAP（思考発話）で収集したデータから特定する。

背景

言語使用は、文法知識の反映ではなく、文化に根ざした社会的行動として理解されるべきである。特にリクエストは、相手の自由を制限し得る発話行為（face-threatening act）であり、文化固有の対人規範や価値観に強く影響される。

日本文化の「内と外」は、発話の形式性と方略を左右する重要な概念である。内集団では率直さと共感が重視され（例：「悪いけど、ちょっと手伝ってくれる？」）、外集団では秩序維持のため、より丁寧で間接的な表現が選ばれる（例：「ご迷惑でなければ、少しお時間をいただけますでしょうか」）。このような場面調整は母語話者にとって自

然だが、第二言語では過度なフォーマリティや曖昧表現として転移しやすい。

一方、「Bella figura」は、相手に好印象を与えつつ関係を円滑に保つ行動規範である。例えば、「Mi scusi, potrei usare il suo telefono un momento?」〔すみませんが、少しお電話をお借りしてもよろしいでしょうか〕のように、明快かつ過度でない丁寧さを重視する。この価値観は、日本語の間接性や控えめな方略と対照的である。

日本人学習者は、「内と外」に基づく慎重さをそのままイタリア語に転移し、距離を広げたり意図を曖昧にしたりする傾向がある。文化的差異の理解は、適切な語用行動と円滑なコミュニケーションに不可欠である。本研究は、両文化の価値観と発話方略の関係を比較し、学習者の語用的特徴を明らかにする。

理論的背景

イタリア文化における「Bella figura」

「Bella figura」は、外見・態度・言葉遣いを通じて良い印象を与えることを重視するイタリア文化特有の価値観であり、日常からビジネスまで幅広く影響する(Bazzanella, 2008; Santoro & Nuzzo, 2017)。社会的調和の中で「自分をよく見せる」ことを通じて関係を円滑に保つ点で、ポライトネス理論のポジティブフェイス志向(Brown & Levinson, 1987)と関連する。

例えば、初対面での「Piacere di conoscerLa」は、敬意と親しみを同時に示す好例である。リクエスト表現においても「Bella figura」は重要であり、たとえば「Mi presti un cavatappi, per favore?」〔栓抜きを貸してもらえる?〕のように、適度な直接性と丁寧さのバランスが求められる。一方、「Dammi un cavatappi」〔栓抜きをくれ〕のような命令形は、相手のネガティブフェイスを脅かすおそれがあり、親しい関係以外では避けられる。このように「Bella figura」は、状況に応じた距離感と丁寧さの調整を通じて肯定的印象を形成する文化的方略である。日本人学習者がこれを十分に理解していない場合、母語の対人距離感を転移させ、過度に形式的または間接的な表現を選ぶ傾向がみられる。これは語用転移の一形態であり、イタリアのポジティブフェイス志向とのずれを生む。

日本文化の「本音と建前」および「内と外」

日本文化のコミュニケーションは、社会的調和を保つために直接的表現を避ける傾向があり、その背景には「本音と建前」と「内と外」という二つの文化概念がある。

「本音と建前」は、状況や相手との関係に応じて発話内容を調整する枠組みであり、対立を避けつつ立場を守るための方略で、ネガティブフェイス尊重に対応する(Ide, 1989)。

たとえば、「もしご都合がよろしければ、手伝っていただけますか」や「悪いけど、ちょっと手伝ってくれる?」のように、相手との関係によって丁寧さと直接性を調整する。この文脈依存的調整は、日本語リクエストの特徴である。

また、「内と外」は人間関係を内集団と外集団に分け、発話スタイルを変化させる原理である。内では率直さが許容され、外では形式性・間接性が求められる。例えば、「これ、ちょっと見てくれる?」に対し、上司には「お忙しいところ恐縮ですが、こちらの資料をご確認いただけますでしょうか」とする。

以上のように、「本音と建前」「内と外」は発話調整の基盤であり、相手のネガティブフェイスを守る文化的仕組みである。イタリア語のようにポジティブフェイスを重視する文化とは方向性が異なり、日本人学習者はこれを転移させることで、慎重または形式的すぎる表現を選ぶ傾向がある。

リクエスト表現とポライトネス理論

リクエストは、相手に行動を求める「行為の強制(face-threatening act)」であり、ポジティブフェイス(承認されたい欲求)とネガティブフェイス(自由を尊重されたい欲求)の調整が鍵となる(Brown & Levinson, 1987)。この調整方法は文化によって異なり、特に日本語とイタリア語では対照的である。

イタリア語では、「per favore」や条件法を用いて両方のフェイスを守る。例えば、「Mi potresti aiutare, per favore?」〔手伝ってもらえますか〕は、自由を尊重しつつ丁寧さを伝える自然な依頼である。一方、「Dammi una mano!」〔手伝って!〕のような命令形は、親しい関係を除いて避けられる。

これに対し、日本語では間接的なポライトネス戦略が多く(Blum-Kulka et al., 1989; Trosborg, 1995)、「もしご迷惑でなければ、少し手伝っていただけますか」のように前置きを用いて圧力を緩和する。これはネガティブフェイス尊重の表れである。

この違いにより、日本人学習者はイタリア語使用時に語用転移を起こしやすく、過度に間接的またはフォーマルな表現を選びがちである。文化差を理解し、適切な直接性を身につけることが重要である。

日本語とイタリア語における直接性と間接性

日本語とイタリア語のリクエスト表現には次のような違いがある。

- 日本語:間接性を重視し、緩和表現や敬語を多用。
  例:「すみません、少しお手伝いをお願いしてもよろしいでしょうか?」
- イタリア語:文脈に応じて直接性を志向。
  例:「Mi può dare una mano un attimo?」

この文化的差異は、学習者がイタリア語で適切な表現を選ぶ際の重要な手がかりであり、直接性・間接性の理解は語用転移の調整に役立つ。

研究方法

参加者

本研究には、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)のB1〜B2レベルに該当する日本人イタリア語学習者20名が参加した。参加者の選定基準は以下の通りである。

- **年齢**:18歳〜35歳
- **学習背景**:大学でイタリア語を専攻または副専攻として学習
- **募集方法**:オンラインプラットフォーム(SurveyCircle、SurveySwap)を活用参加者の内訳は以下の通りである。
- **女性**:12名 **男性**:8名
- **学習経験**:2〜4年(平均2年半)

すべての参加者は日本語を母語とし、ロマンス系言語の学習経験はなかった。データ収集前に、授業またはオンライン上で研究の目的と方法について説明を行い、参加者の同意を得たうえで回答を収集した。すべての回答は匿名で処理され、個人情報の保護に十分配慮した。

データ収集手順

データは、GPP研究チーム（サンパウロ大学「中間言語・異文化間および文化相互間語用論」）の分析枠組みに基づき、以下の3つの手法を用いて収集した。

1. **Multiple-Choice Discourse Completion Task – MCDCT**（選択式ディスコース完成テスト）

8つの社会的状況（社会的距離と負担度の組み合わせ）を提示し、5つの選択肢の中から最も適切だと思うリクエスト方略を選ばせた。これにより、学習者がどの程度文化的文脈を読み取り、適切な直接性・間接性を判断しているかを測定した。

2. **Written Discourse Completion Task – WDCT**（自由記述式ディスコース完成テスト）

同じ8状況をもとに、学習者自身の言葉でリクエストを自由に記述させた。ここでは、実際に産出される表現の構造や、敬語・条件法・緩和表現などの使用傾向を分析した。

3. **Think-Aloud Protocol – TAP**（思考発話プロトコル）

MCDCTおよびWDCT回答後、学習者に「なぜその表現を選んだか」を口頭で説明させた。これにより、発話選択に影響を与える意識的・無意識的要因を特定した。発話は簡単なメモで記録し、定性的分析に用いた。

分析手順

収集したデータは、定量分析と定性分析の両面から検討した。

1. 定量分析

MCDCTでは、5つの方略タイプ（①直接的要請、②ポジティブポライトネス、③ネガティブポライトネス、④オフレコード、⑤非実施）の選択頻度を算出し、社会的距離と負担度の組み合わせごとに分布を比較した。

2. 定性分析

WDCTおよびTAPの内容から、語用転移の特徴を示す具体的な表現パターンを抽出した。例えば、条件法の過剰使用（例:「Potrei…」〔〜できるかもしれませんが〕の多用）や、「すみません」など日本語の定型的前置きの直訳傾向が確認された。これらをイタリア語母語話者データと比較し、文化的要因に基づく差異を特定した。

信頼性と倫理的配慮

分析の信頼性を確保するため、WDCTデータのコーディングは一定の基準に従って一貫して行い、分析手続きの透明性を保った。TAPデータについては、逐語的な録音や書き起こしは行わず、主な理由付けをメモ化し、プライバシー保護に配慮した。また、全参加者に研究の目的と方法を事前に説明し、同意を得たうえで調査を実施した。すべての回答は匿名で処理され、個人情報は厳重に管理された。

結果

MCDCT・WDCT・TAPの総合的分析

本研究のMCDCT、WDCT、TAP分析を総合した結果、日本人イタリア語学習者のリクエスト表現には、文化的要因に起因する語用転移が複数の側面で確認された。主な傾向は以下の3点である。

1. 社会的距離と負担度によるフォーマリティおよび間接性の過剰

社会的距離や負担度が高い状況（例:隣人に栓抜きを借りるなど）では、学習者は条件法や「cortesemente」などの丁寧表現を過度に使用し、イタリア語母語話者にとって不自然なフォーマリティが見られた。

- 学習者の表現（WDCT）
  「Mi scusi, potrebbe cortesemente prestarmi un cavatappi?」
- 母語話者の自然な表現
  「Buonasera, mi presterebbe un cavatappi?」

この傾向は、MCDCTでも確認され、より直接的で自然な選択肢よりも、フォーマルかつ遠回しな選択肢を選ぶ割合が高かった。TAPデータでは、「失礼にならないようにしたい」「相手の迷惑にならないように」といった内省的理由が多く見られ、日本語の「内と外」に基づく慎重さが転移していることが明らかになった。

2. 条件法の過剰使用と構文の複雑化

学習者は、条件法をポライトネスの手段として過度に用いる傾向があり、文が不必要に長く、構文的にも複雑化していた。

- 学習者の表現（WDCT）
  「Se fosse possibile, mi piacerebbe che lei mi passasse quella bottiglia d'acqua.」
- 母語話者の自然な表現
  「Mi potrebbe passare la bottiglia d'acqua?」

TAPデータでは、「直接言うときつく聞こえると思った」「イタリア語でも日本語のように‘もし〜できたら’を使う方が丁寧だと感じた」といったコメントが確認され、条件法の誤用が文化的丁寧さの誤解から生じていることが示唆された。

3. 日本語特有の定型的前置きの転移と非実施方略

「すみません」多くの学習者が、依頼の冒頭に「すみません」に相当するイタリア語の「Scusi」「Mi dispiace」を繰り返し用いる傾向を示した。これにより、発話が不自然に重く聞こえる例が確認された。

- 学習者の表現（WDCT）
  「Scusi, scusi, potrebbe aiutarmi?」
- 母語話者の自然な表現
  「Mi aiuta un attimo?」

さらに、一部の学習者は「相手に迷惑をかけるくらいなら依頼をしない」と判断し、MCDCTで「非実施（non realization）」を選択する傾向が見られた。この場合、MCDCTでは選択肢として数値化されるのみで理由は明示されないが、WDCTでは「今回はやめておく」などの形で、行動回避の意図を説明する例もあった。TAPで

は、「相手が忙しそうならお願いしない」「自分でなんとかする」といった内省的理由が挙げられ、非実施方略が単なる回避ではなく、文化的判断に基づく慎重な行動であることが明らかになった。

文化的要因と語用転移の関係

これらの傾向から、日本人学習者のリクエスト表現における語用転移は、次の3つの文化的要素と関連していることが確認された。

- **日本語の「内と外」概念に基づく発話調整**
  相手との関係性を重視するあまり、距離を取りすぎる傾向が見られた。
- **「迷惑をかけない」志向による直接性の回避**
  イタリア語話者に自然な依頼の強度を下回る表現を選ぶ傾向があった。
- **「Bella figura」の誤解による過剰フォーマリティ**
  一部の学習者は、「Bella figura」を「常に丁寧でなければならないこと」と解釈し、親しい関係でも形式的表現を維持する傾向が見られた。

これらの結果は、単なる言語的誤りではなく、文化的価値観の違いに根ざした語用転移の認知的・社会的側面を示している。

教授法への提案

本研究で明らかになった日本人イタリア語学習者のリクエスト表現における語用的課題を克服するためには、文化的背景を考慮した教授法が不可欠である。特に、直接性への意識化、条件法の適切な使用、異文化理解の促進が重要な柱となる。

本研究で使用したMCDCT、WDCT、TAPは、単なるデータ収集のための手段にとどまらず、学習者の語用意識を高める教授活動そのものとしても活用できる。

(1) MCDCTを用いた気づき(noticing)の促進

MCDCTは、文脈の異なる8つの場面から最も適切だと思うリクエスト方略を選択させる形式である。この活動を授業内で使用することで、学習者は複数の表現を比較しながら、自らの判断基準を明確化できる。例えば、「Mi presti un cavatappi, per favore?」と「Mi dispiace, la richiamerò più tardi」のどちらが状況に適しているかを選ぶ過程で、社会的距離や負担度に応じた直接性の違いに気づくことができる。このように、MCDCTは気づきを促すタスク(noticing task)として機能する。

(2) WDCTによる表現産出と自己修正の機会

WDCTでは、学習者自身が自由にリクエストを記述する。実際の授業でも同様の形式を用いることで、学習者が自らの言語資源を活用しつつ、文脈に適した発話を試行できる。例えば、「Mi scusi, potrebbe cortesemente prestarmi un cavatappi?」のような過度にフォーマルな表現を産出した学習者が、フィードバックを受けて「Buonasera, mi presterebbe un cavatappi?」のようなより自然な言い方に修正する過程は、語用的適切さを学ぶ上で有効である。WDCTは、自己修正(self-repair)とメタ語用的意識の形成を支援する実践的タスクである。

(3) TAPを通じた内省的学習

TAPでは、学習者が「なぜその表現を選んだか」を口頭で説明する。授業でこの形式を取り入れると、学習者は自らの語用判断の根拠を言語化でき、他者との比較や共有を通じて異文化的視点を育むことができる。例えば、「相手に迷惑をかけたくないから‘もし〜できたら’を使った」と説明する学習者の発話は、文化的価値観が語用行動にどのように影響するかを理解するきっかけとなる。TAPは、認知的内省(cognitive reflection)と文化的意識の深化を目的とする活動として位置づけられる。

(4) 統合的教授アプローチ

以上の三つの活動を段階的に組み合わせることで、学習者は「気づく → 産出する → 内省する」という循環的プロセスを経験できる。これは、単に正しい表現を習得することではなく、文脈に応じた語用的判断力を育成することにつながる。

さらに、MCDCT・WDCT・TAPの結果を授業にフィードバックとして還元し、実際のリクエスト場面(例:隣人に物を借りる、友人に頼みごとをする、上司に依頼する)を想定したロールプレイに発展させることで、学習者の発話調整能力を実践的に強化できる。

このように、研究で用いられたタスク自体が教育現場での活動として再利用可能であり、学習者が文化的背景の異なる社会的行為を意識的に調整するための有効なツールとなる。

結論

本研究では、日本人イタリア語学習者がリクエスト表現において直面する語用的課題を、文化的背景と語用転移の観点から分析した。GPP研究チーム(サンパウロ大学)の分析枠組みを用いることで、学習者の発話に見られる過度なフォーマリティ、条件法の誤用、間接性の偏重などが、日本文化の「内と外」や「本音と建前」に基づく価値観と関連していることが明らかになった。また、日本文化に基づく価値観では、丁寧で間接的な表現が選好されやすく、その結果として丁寧表現の過度な使用に繋がりやすく、さらにその手段として条件法の誤った使用が見られるとも考えられる。

一方、イタリア文化における「Bella figura」は、適切な直接性とフォーマリティのバランスを重視する価値観であり、学習者の表現に見られる慎重さや遠回しさとは対照的であった。このような文化的差異は、単なる言語的誤りではなく、異なる社会的期待に基づく語用転移の現れとして理解すべきである。

さらに、MCDCT、WDCT、TAPを組み合わせることで、学習者が自らの発話方略を意識的に見直し、他者との比較を通じて語用的判断を再構築する過程が観察された。これらの活動は、単なる評価手段ではなく、学習者が「気づき」「産出し」「内省する」循環的プロセスを経験するための有効な教授法として機能することが示された。

本研究の成果として強調すべき点は、言語教育が「正しい/誤り」という二分法に基づくべきではないということである。発話行動の評価は、あくまで「どの程度文脈に適しているか」という相対的な視点から行う必要がある。社会的距離や行為の負担度など、文脈的要因によって最も適切な方略は変化し得るため、学習者には多様な選択肢

の中から状況に応じて判断する力を育てる教育が求められる。

このような視点に基づく語用教育は、文化間の相互理解を深め、学習者が自らの文化的枠組みを意識的に再評価しながら、より柔軟で適応的なコミュニケーション能力を身につけることにつながる。今後の課題としては、異なる母語背景をもつ学習者との比較研究を通じて、語用転移の普遍的要素と文化特有の傾向をさらに明らかにし、教授法の一般化と深化を図ることが挙げられる。

参考文献

Bazzanella, C. (2008). *Linguistica e pragmatica del linguaggio. Un'introduzione.* [言語の言語学と語用論・入門] Laterza. URL: https://hdl.handle.net/2318/98736

Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (1989). Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies. Ablex Publishing.

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). Politeness: Some universals in language usage. Cambridge University Press. https://doi.org/10.1017/CBO9780511813085

Council of Europe. (2020). *Common European Framework of Reference for Languages: Companion volume with new descriptors*. https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2020/16809ea0d4

Grupo de Pesquisa em Pragmática (Inter)linguística, Intercultural e Cross-cultural (GPP). (2024). Pragmática em 12 línguas: Estudos sobre pedidos e estratégias interacionais [12言語における語用論:リクエストおよび相互行為に関する研究]. Universidade de São Paulo. URL: https://gpp-pragmatics.org/

Nakane, C. (1970). *Japanese society* [日本社会]. University of California Press.

Santoro, E., & Nuzzo, E. (2017). Apprendimento, insegnamento e uso di competenze pragmatiche in italiano L2/LS: La ricerca a partire dagli anni Duemila. [外国語としてのイタリア語における語用能力の学習・教育・使用。2000年代以降の研究動向] *EuroAmerican Journal of Applied Linguistics and Languages, 4(2), 1–27.* https://doi.org/10.21283/2376905X.7.116

Taguchi, N. (2011). Pragmatic competence in foreign language education: Cultivating learner's communicative action. *The Modern Language Journal*, 95(1), 4-21. https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.2011.01172.x

Trosborg, A. (1995). Interlanguage pragmatics: Requests, complaints, and apologies. Mouton de Gruyter. https://doi.org/10.1515/9783110885286



アンドレア・チヴィーレは、ペルージャ外国人大学（イタリア）イタリア語・イタリア文化学部専任講師。専門は語用論および異文化間コミュニケーションであり、特にブラジルと日本のイタリア語学習者を対象に、リクエスト表現における語用転移と文化的影響を研究している。サンパウロ大学のGPP研究チーム（中間言語・異文化間および文化相互間語用論）と協力し、多言語間のリクエスト表現と対人行動の比較研究にも従事。近年は、日本のイタリア語教育において語用能力を育成する実証的教授法の開発と、文化間のポライトネス理解の促進に取り組んでいる。

Andrea Civile is a lecturer in Italian Language and Culture at the University for Foreigners of Perugia. His research focuses on pragmatics and intercultural communication, especially on pragmatic transfer and cultural influence in request-making among Japanese and Brazilian learners of Italian. He collaborates with the GPP (Grupo de Pesquisa em Pragmática) research team at the University of São Paulo on cross-linguistic studies of requests and interactional behaviour. His recent work includes the development of empirically based pedagogical approaches to enhance pragmatic competence in Italian language education and to foster intercultural understanding of politeness across cultures.



The 7th Episode of the PIE SIG Podcast is now live!

This is your chance to hear Kim Rockell bring music and language learning together. Kim performs a Noh chant, reflects on completing his PhD after the 2011 earthquake in New Zealand, discusses software that helps with speech, and closes with a beautiful acoustic guitar performance.

An engaging listen for anyone interested in how sound and rhythm shape learning.

https://www.buzzsprout.com/2520024/episodes/18570309



JALT2026: Beyond the Classroom—From Local Voice to Global Impact

November 20–22, 2026

WINC, Nagoya, JAPAN.